までもない。書寫の時代と寫手の名が末尾16—18の3行に見え、開元八年五月二日に、沙州大秦寺の法徒の索元定が傳寫したと記されてある。字體は正楷で、既に佐伯博士の述べられたやうに、民字を二箇所に於て缺畫してあるが、その外にも治の末筆を缺畫してある。

佐伯博士の解説に從うと、この讃は「耶蘇變貌日」もしくは「耶蘇顯容聖日」と稱する祭日(八月六日)に於て唱へる讃美の誦であらうとのことであり、かく考へる理由は、第一句に「敬禮大聖慈父阿羅訶皎皎玉容如日月」とあるが、この皎皎玉容如日月といふ文句は、イエス變貌の時のことを記した聖書の記事と合致してゐる……從つてこの讃は、變貌記念祭日の禮拜式に使用するものであることは明白である」といふのである。博士はまたこの題目に記されてある「大聖」はイエス・キリストを意味してゐるとしか思はれない、イエスを示すに大聖・聖人の語を用ゐることは、その神性に對してふさはしからぬことながら、當時の景教學者等には、他に適當の表示法が無かつたであるといひ、「通眞歸法」といふのは、この變貌の奇蹟を言ひ表はしたもので、他に適當な表示文句を考へ得なかつた時代であるから、或は不適當な文句と考へられるかも知れないが、致方もなかつた次第であるとの意を述べて居られる。

自分はこの讃の劈頭に、「敬禮大聖慈父阿羅訶」とあり、また讃中に「大聖法皇高居無等界」とか、「我今大聖慈父」などといふのみならず、別に景典の三威蒙度讃には「大聖彌師訶」、次に述べる宣言至本經にも「大聖法王」などと見えることなどを考へれば、大聖といふのはクリストだけを指すのではなく、神聖なるといふ程のアトリビュートで、從つて慈父阿羅訶にも慈父にも法皇にも法王にも彌師訶にも冠せられるのではないかと思ふ。さうしてこ